



TITLE:

7-3 広野求和先生とぼく (7. 総説)

AUTHOR(S):

北村, 泰一

CITATION:

北村, 泰一. 7-3 広野求和先生とぼく (7. 総説). 京大地球物理学研究の百年(II) 2010, 2: 136-137

ISSUE DATE:

2010-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/169878>

RIGHT:

広野求和先生とぼく

北村泰一（1955：修士課程修了，1961：博士課程修了．九大名誉教授）

広野先生はぼくの指導教官

私が大学院の長谷川万吉研究室に入ったのは、1950年4月(昭和30年)であった。同期には福島紳君(本集録の5-1章(北村)を参照)と橋詰庄一郎君がいた。福島は後に南極で遭難死した。

入学してすぐに広野求和(もとかず)氏(当時助手;2002没)が私の指導教官として決まり、私は「地磁気」を勉強することになった。その頃、広野氏は世界的な論文である「赤道の地磁気日変化が日中に著しく増加する現象(赤道増加)の理論」を完成した。同時期にオーストラリアのマルチン教授も同様の論文を書いたので、マルチン-広野理論と呼ばれて、広野氏の名前は学会でも有名であった。自分は、広野氏のような有名な人が自分の指導教官になったことに感激よりも恐縮を覚えた。自分は学問一途ではなく、色気があって山へも行きたいし、どこか未知の土地へも行ってみたい、と思っていた。こんな二股を掛ける事が出来るのだろうか。しかし、山へ行ったら、やればいいんだろ?と生意気なことを考えていた。それでも、自分の山行が広野さんにバレないようにと気を使った。

私の修士論文は、広野氏がアイデアと理論式をたて、私とその計算を引き受けるというものであった。広野氏から何かを命じられた時は、私は予定された山へ行けるように人より努力して早く仕上げた。夏期には、友人が夏休み一杯を使ってやることを、その半分の時間でしなくてはならない。まだコンピューターなどなく(修士の終わりにやっと京大最初の計算機、KDC1が現れた:本集録の7-2章(加藤)を参照)、ガチャガチャ・チーンと鳴る手まわしのタイガー計算機時代は過ぎていたが、電動機でガチャガチャ・ガッチャーンと動くモンロー計算機時代であった。この計算機は重くて家に持って帰れない。そのため、夏休みの前半は大学で半徹夜の日が続いた。やっと仕上げたと思ったら、サインとコサインを間違えて、またやり直しというようなことが何回もあった。

それでも何とかやり遂げて、こっそり教室を抜け出して、その日の夜行列車に乗った。冷房車などなかったので車内はムシ暑かったが、気持ちはせいせいしていた。清涼な高山の空気を満喫して京都へ帰ってから、京都ですっと計算をしていたような顔をして広野氏に結果を提出した。広野氏は日焼けした私の顔に気がついていてに違いなかったが、一言もそれに触れなかった。

広野先生の手紙

修士の2年目の夏、当時世間で話題となってきた南極へ行くために大学院の博士課程への進学を諦め、東京へ出ることにした(本集録の5-1章(北村)を参照)。無事に第一次観測隊員となって初代の観測船宗谷に乗りこんで意気洋洋と東京の晴海埠頭を出航し、東支那海、フィリピン沖から、インド洋を通して、最後の寄港地ケープタウンへ入港した。そこでは内地からの手紙がどっさり待っていた。長谷川研究室一同の名前で激励の手紙も来ていた。今でも残してあるが、みな「頑張れよ」とか「生きて帰ってこいよ」という文句が並んでいる中を、広野氏からの手紙には、そんな文字は一言もなく「貴君の結果を今論文にしている」とか、「いま新しいアイデアを得て、こうやっている。貴君の帰国時には完成していると思う」とか、研究上のことしか書いてなかった。自分は教室のことなどすっかり忘れて、「未知の前途」にワクワクしているのに、広野先生は本当に研究一途の人だなあと、研究とは関係のない犬係として南極に向かっている自分が申し訳のないような気になった。

最初の南極越冬から無事に生きて帰ってきた時、自分が博士課程に入っていることを知った。広野先生に帰国の挨拶に行ったら、既に電波研究所に移っておられて会えなかった。

私は、その翌年、第三次越冬隊として再び南極へ向かった(本集録の5-1章(北村)を参照)。今度は宇宙線観測という役割であった。この時、宇宙磁場と宇宙線に興味を抱いていたからであった。この越冬では、生きていたタロジロとの再会という自分の人生に大きな影響を残す事件に出会った。(文献①)

第三次越冬から帰国して、自分の南極への気持ちは一応おさまった。博士課程を一年延長して四年居たが、無事に終えて、同志社大学に就職した。

広野先生の九大時代

暫くして、広野先生は電波研究所から九大理学部物理学科に新設された地球物理学講座の教授に迎えられ、福岡に赴任された。九大には地球物理学科はなく、物理学科に大気物理学講座と地球物理学講座があった。1969年3月、ご縁があって私は同志社大学から九大へ転じ、広野教授の講座の助教授となった。広野教授は、電波研時代にレーザーを夜空に照射して高層大気中の浮遊物（エアロゾル）を研究するアイデアを思いつかれた。それを九大で開始しようと考え、私を助教授にして下さったに違いないのに、私は、それとは全く異なる地磁気変化の地球的規模での研究をやりたいと主張した。広野先生はさぞガッカリされたであろうが、黙ってそれを許して下さい。

九大理学部には、各学科の教授と助教授で構成される「運営会議」がある。物理学科運営会議では、地球物理と大気物理以外の物理固有（素粒子とか物性理論講座）の教授から、地球物理系講座に色々なことが問いかける。理論系分野の人は理屈っぽい。そんな時、こちらの話の論理が整理されていないと議論が収まらない。どんな議論でも「論理」とそれを相手に納得させる「弁舌」が必要だが、無口で知られている広野教授にはその弁舌性がない。理論系の教授が広野教授に、時には意地悪い質問をしても、広野先生はそれを知ってか知らずかトンチンカンな返事をする。それで相手はいらいらし、その鉾先は助教授である私に向かってくる。私は地球物理系講座の一大事だと思い、僭越な気がするがそれに答える。広野教授は知らん顔をしている。とうとう質問者は、初めから助教授である私に向かって言葉を発するようになった。広野先生は、質問が本当は自分に向けられていることに気がついているのかいないのか、時にコックリコックリと居眠りをされる。教室の並み居る教授、助教授が20人ほどいる中で、である。クスクス笑っている人もいた。私は広野先生は太っ腹だなと感心した。

もっと、びっくりすることがあった。その頃、まだアメリカ空軍が板付（現福岡）空港にいて、戦闘機などの離発着コースが九大の真上を通っていた。空港に近いので、戦闘機は九大の上、多分50mくらいのところを飛んでいたのであろう、パイロットの顔が見えるほどであった。戦闘機が通る度に、物凄い轟音で会話が中断される状態であった。私が赴任する直前に、ファントム戦闘機が建築中の計算機センターに墜落し、それを契機に激しい学生運動が起こった。その時、広野教授は物理学科主任として、学生群と面談することを余儀なくされた。学生運動といっても現在の学生には想像もつかないだろうと思う。無茶苦茶な論理で教授を吊し上げるのである。学生が教授を「専門バカ」と罵倒し、コゾキ回す場面もあった。

ある時、学生群（民青：民主青年同盟とか革マル：革命的マルクス主義派＝日本マルクス主義学生同盟）が主任を呼び出し、教授－学生会談が始まった。広野主任が学生の問いに適切に応答しないので、学生が激昂して話がこじれ始めた。他の教授から、お前も出ろと忠告されて私も出席した。初めは、学生は「助教授は黙っておれ」という態度で、広野主任に議論を吹っかけていたが、ラチがあかないと悟ったか、私に向かってくるようになった。私が学生との受け答えに懸命になっていた時、その時は学生が興奮して今にも殴りかかる雰囲気であったが、フト見ると、広野主任はコックリコックリ居眠りをしておられる。私は腹がたった。こんなときに居眠りとは何事か、僕がこんなに苦勞をしているのにと。しかし、こんな中で居眠りできるとは見上げた度胸だと一方では感嘆した。さすがに広野先生、私に真似できることではない、とますます尊敬の念を深めた。

糖尿病

拙宅は広野家から数軒おいたところにある。退職後も親しくお付き合いしていたが、ある日、広野夫人が私の家に「主人が散歩から帰ってこない！」と駆け込んでこられた。私はスワッとばかりに夫人を車に乗せて、広野先生の散歩道になりそうなところを走り回り、かなり離れたところの道端に座りこんでいる先生を発見した。夫人が適切な手段を講じてコトなきを得たが、その時初めて、広野教授がかなり重い糖尿病であることを知った。低血糖に陥ると意識がモウロウとして居眠り状態に陥ってしまうという。先生の糖尿病はかなり前から重症であって、絶えず、糖類や何かを持参されていたという。そういえば、現役の時、夕方6時ころになると、広野先生はビスケットの類を食べておられた。私なら夕食を一度や二度抜かしても平気なのに、とその時は思っていた。あ、そうかと気がついた。先生が物理の他の教授から攻められている時、学生が激しい口調で議論してきた時、広野先生が見せたあの「コックリ、コックリ」に、自分はその太っ腹に一驚し感服したが、あれは糖尿病の故だったのか、とガッテンがいったのは、私も退職して数年たった時であった。

文献① 北村泰一「タロジロの真実」小学館文庫、2007。